子ども時代と私(2)

昭和、昭和、昭和の子どもよぼくたちは

津守　房江

時の扉は突然開いて、私たちに
過ぎ去った日の断片を、影絵のように
見せてくれる

寒さの厳しかった二月のある夕方、夫と私は麻布のビルの谷間にある、ダンボールの卸問屋から出てきた。折り畳んだ大きな新しいダンボールを十個、紐でくくって持っている夫の背中に、強いビル風が

吹きつけ、ダンボール箱をあおっていた。

わが家には、夫の父が若いころアメリカで買った十九世紀の聖書の注解書など、古い英文の書物があった。長く保管していたが、もっと有効に使える場所に移管するため、この日は新しいダンボール箱を買いに来たのだった。

後ろから見た夫は、風邪が抜け切らず、年老いて見えた。そのとき、私は思いがけず子どものころ歌ったあの歌を、口ずさんでいた。

昭和、昭和、
昭和の子どもよ
ぼくたちは、
心もきりり、
姿もきりり、

歌いながら唐突に夫の前に立って、ダンボールを半分持つと、タクシーを拾うため、風の中で手を上げた。結局私の方がもっとよろけて、やっと助けられて家に戻った。

その後もこの行進曲風の歌が、時々口をついて出てくることに気がついた。あれは昭和になったとき、大人たちが子どもに歌わせようとして作った歌だったのだろう。昭和一桁生まれの私の親は明治の生まれである。明治生まれの人が大正の十五年間を通って、昭和という新しい時代に子どもたちに望んだのは「心もきりり、姿もきりり」ということだったのだろう。そのころ家にあった歌の本には、この歌の歌詞にセーラー服の女の子と、学童服の男の子が並んでいる挿絵がついていた。河目悌二の絵だったと思う。

それにしても、ここ一番しっかりして思う時に、子どものころの歌が飛び出してくる。昭和の初めに新しい時代精神として、「きりり」と願ったこと

は、こんな形で、子どもの中に残っていたのだろうか。

＊

時代の精神が「きりり」を望んだとしても、家庭の中では子どもたちは、いつも「きりり」としているわけではない。子どもたちはよく風邪をひいたが、一度風邪になると温かい葛湯を飲んで、長いこと寝ていた。吸入器という喉の治療道具はいやだったが、床の中で過ごすのは、決していやではなかった。

なぜ、親たちがそんなに子どもを大事にし、病気を恐れたかというと、そのころはどこの家にも幼いうちに死んだ子どもがいたからだと思う。私の家では、一番目が死産で、二番目が一歳四か月の時に死んだという。母は死んだ男の子を「けん坊」といい、私たちには「お兄様」と話した。仏壇には茶色くなった赤ん坊の写真があったが、「お兄様」と呼ぶには違和感があった。何十年たっても母は毎朝炊き立てのご飯と水を供えた。供えたものを置きっ放しにするのを母はとても嫌った。母にとっては死んだ子どもが近くにいるようであり、死の世界とつながっていたのだろう。宗教というより、素朴に幼いものの死をいたみ続けた。その思いは後から生まれた私たち姉妹に向けられ、細やかな世話を惜しみ無く注いだことと思う。

私は現在の台東区立根岸幼稚園の一年保育に行ったが、風邪をひくと父母はすぐ休ませたので、私の欠席が特に多かったからか、私がまだ茫漠とした世界に住んでいたからか、友達についての思い出はほ

とんど無い。ただ先生の袂の揺れ動く様子とか、走り回る男の子たちのたてる響きなどを記憶しているだけである。

＊

私の読書は手当たり次第に活字を拾って読むことから始まった。

多分雑誌の発売日だったのだろう、『幼稚園』『小学〇年生』がとどけられる日、自分の本だけでなく姉たちのも、母の婦人雑誌の『主婦の友』も全部目を通うした。

姉が『少女倶楽部』を読むころになると、姉が一

応読み終わるのをじっと待っていて、もう一度読み返す時、声を出して読んでもらった。薄暗い階段の下から三段目当たりに腰を下ろして、姉のわきから首をのばして聞き入った光景は、今も忘れることはできない。

やがて吉屋信子の少女小説や、佐藤紅緑の本が置かれるようになったが、私を捉えたのは、佐々木邦著のユーモア小説である。特に『苦心の学友』という本が好きで、耽溺するように繰り返し読みふけった。筋といえば、華族（貴族）の若様があまり勉強の出来が悪いので、ご学友が住み込む。主人公のご学友の少年のカルチャーショック、いたずらで遊び好きの若様とのやりとり、芽生えてきた少年たちの友情がある。監督をする老人は少年たちが怠けると、『散乱心を戒めて……』といって注意を促した。その言葉も記憶に鮮やかである。

四十年くらい後になるだろうか。『苦心の学友』が復刻されて、夫が図書館から借りてきてくれた。

私はちらっと見ただけで、手に取る気さえ起こらなかった。『これがお母さんの愛読書か……』と苦笑されたからではない。自分では否定する気持ちはまったくないから、強いていえば、照れ臭いような、人見知りにも似たものなのである。

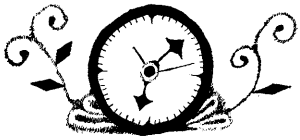
ユーモアはその時大声で笑わなくても、いつまでも心に残るものである。出来事を対象化してみるからユーモアがでてくる。今でも落ち込んだ時、一方では再起不能みたいになりながら、『どうってことない』と思っている自分がある。まだあの本を手に取る気になれない自分は、頑固で恥ずかしがり屋なのだと、ユーモラスに自分を見ている。

＊

もう一つ、子どものころの私の変わった愛読書について、触れてみよう。少しためらったのは、この本が正式の本ではなく、『主婦の友』の付録の『子どもを叱らずに育てる法』という小冊子であったからである。

前半が教育論で、後半は『子どもに読んでやるお話し』『絵のかきかた』などがあった。これも河目悌二の挿絵で楽しかったが、特に私を捉えたのは前半の教育論だった。私は『叱らずに……』ということにひきつけられたと思うが、私自身はそんなに叱られることもなく、姉たちが叱られるのをいやだと思っていた。だから母が理不尽な叱り方をすると、この本をもってきて「そんな叱り方はいけないってこの本に書いてある」と母に言った。母が笑いをかみ殺していたのは、私があまりに幼かったからだろう。

この本の作者は、霜田静志先生だったが、当時の



私には名前の読み方さえ分からなかった。しかし頭の奥に字の記憶が残っていたのだろう。二十年近くたって児童学を専攻した時、『ニイルの学校』の紹介をした大著にこの名前を発見した。二十世紀の初めの自由教育の実践者として、ニイルを日本に紹介したのがこの人だと知った。

それからまた二十年、井荻児童研究所の研究会から招かれて、夫と二人で私たちの絵の研究について話に行った。この研究所が霜田先生の自宅の続きにあって、個人の力で建てられたものであることを知った。高齢の先生がその一生を一人の草分け的学者として、在野で歩まれたことに感銘を受けた。勿論十歳になるかどうかの私に大きな影響を与えてくださったことも、お話しした。

初めに紹介した「昭和、昭和……」の歌は次のように続いている。

山、山、山なら富士の山、
行こうよ、行こう、足並みそろえ、
タララッタ、タララ……

このように歌いはやされても、決して足並みをそろえない有名無名の人がいた。霜田先生もそうだろうし、ささやかではあるが私の父もそうだったように思う。子どもの目からも何か大切なことを守っていることを感じていたが、大人となってはっきりとした流れの中でとらえ直すと、一層この時代に子どもとして出会ったことの一つ一つが、意味のあることと感じられてくる。

（歌詞は記憶のみにたよりました）